

スポーツ観の変遷

—大衆化と高度化をめぐる—

古宇田 隆 久

はじめに

スポーツの大衆化、日常化ということが叫ばれている。

テレビ、ラジオ、新聞等のマス・コミや日常世会話などにおいても、このスポーツという語が人々の間で気軽に用いられ、その生活の中にスポーツ、体育が多彩にいろいろられるようになってきている。それは、今迄学生や一部の恵まれた人達の私有物であったスポーツに対して、人々の欲求の増大とその表現のために必要な社会的条件が整いつつあることを示すものである。すわわち、週休二日制に伴う余暇時間の増大、経済的ゆとりによる生活意識の変化、労働の近代化に伴う身体的欲求の高まりなど、一連の社会変化によってスポーツ参加への必要性が生じてきた。人々が体験するスポーツ活動はもちろんのこと、マス・コミを媒介としたプロスポーツ、ギャンブルスポーツへの関心の増大など、一つの社会的機能として、スポーツは人々の生活の中に広く、深く浸透しつつある。実際、ゴルフ、テニス、スキー、スケート、およびブームは去つたがボーリング等の商業的スポーツをはじめ、野外レクリエーションスポーツ、職場スポーツ、体力づくり運動等々、まさに百花繚乱の様相を呈している。しかし人々が呼んでいる、このスポーツなるものについて、その観念や目的といったものは一様ではなく、これらのものがどのような社会的背景をもって抬頭して来、また将来どのように推移していくのかを考えなくてはならない。

現状をみるならば、ゴルフ、テニス、スキーなどの華やかな種目は、大資本やマス・コミの作り出すレジャーブームの影響による営利目的に利用され、その他の活動についても、大部分の一般市民にとってスポーツの場に積極的に参加できる時間、場所、金銭的余裕を得ることは、まだまだ容易ではなく、ラジオ、テレビを媒介としたスポーツの観戦という消極的、間接的な参加を甘受している人も多い。しかしながら、オリンピック、プロスポーツといったハイレベルなものへの憧れや、医学、生理学的見地からの必要性も見直され、なわとび、体操、マラソン等の、いわゆる軽スポーツの

愛好者も増えてきており、市民意識の高まりや労働条件の合理化等により、諸条件にゆとりができ、あまり多くの経済的負担を伴わないスポーツ活動に参加し易くなってきたことも事実である。そういう意味では、スポーツの大衆化が定着しつつあるといえるであろう。（前述の商業的スポーツも、最近では、大した経済的負担と思わない人が増えているらしいので、一応大衆スポーツの部類に入れて論を進めていく）

このように各方面から取り上げられつつあるスポーツではあるが、将棋、囲碁、ドライブといったレジャーの類のものや、散歩、なわとび、体操という手軽なものから、ボクシング、レスリングといった格闘的なものまで、その捉え方は、各人によって非常にさまざまである。同様の捉え方として、知識人の間においてさえ、体育と体操を混同して使用している人間が少なくないという現状は憂うべきものがある。

このような事情をふまえて、今日我々が扱っているスポーツとはどのようなものなのか、類似語としての運動、体育、遊戯、競技などの語との関わりをも考えながら、歴史的、文化的側面から現代、また将来におけるスポーツの観念について言及していきたいと思う。

Ⅰ スポーツの意味

1) 日本語のスポーツをめぐって

スポーツという語と関連して遊戯、競技、体育、運動などの類似語があるが、それらを厳密に区別して使用していないのが現状である。その時々に応じて、それらを広義、あるいは狭義に解釈している。

後で詳しく述べるが、端的に言うならば、競技はスポーツ活動の一つの形式であり、体育ではいくつかのスポーツ種目を教育の手段として用い、運動は上記の遊戯、スポーツ、体育等を含めた総括的、漠然的な呼称である。日本語のスポーツは、もちろん英語の sport(s) であるが、明治の初期、我が国に輸入されてから、その解釈は運動—運動競技—（そのまま）スポーツ、が一般的である。

発生的、性格的にみるならば、スポーツは遊戯との血縁関係が深い。例えば児戯に観られる“かけっこ”を量的に 100m なり 200m なりに決めて競争という形式をとれば陸上競技というスポーツへ発展し、キャッチボール程度のものから野球という複雑なものへと変化していく、その過程において、遊戯からスポーツへの間に引ける明確な境界線はない。

行方人間が増え、地域が拡がり複雑化することによって、その空間の中における共通のまとまりが必要になってくる。つまり一つには遊戯が組織化、高度技術化、規

則化することによって、競争的色彩を強め、スポーツという文化的活動に発展してきたと考えられる。

今日行なわれているスポーツ各種日には“競技”色が頭在しているものが多いが、遊戯においても本質的に“競争”の要素は内在している。発生的、性格的には似ている面が多い両者であるが、遊戯の方は字義からも明らかなように、「気晴らしのための遊びや、気まぐれな戯れ」であり、一方スポーツはその組織化、高度化が進むことによって、競技色を強め、徐々に遊戯の領域から遠ざかってしまい、違った文化的側面へ移行し、遊戯との血縁関係をそこなうことになる。現在では特にその感は強い。後まわしになったが、ここで取り扱う遊戯とは、何も児童戯に限った遊びだけではなく、大人のそれをも含む、広く社会現象としての遊戯を指す。

2) スポーツの語源

別に遊戯との関係にこだわる訳ではないが、その血縁を語源的に求めてみるならば、スポーツ——sport(s)の語源は、運ぶ、持ち去るを意味する中世ロマンス語の *desportare* に由来し、それが、気分を転じたり、気晴らしする意味の動詞の *deporter* や *desporter* へと推移し、さらに男性名詞 *desport* がつくられていったとのことである。しかも、それが11世紀ごろにイギリスにとり入れられてからは *disport* に変相し、さらに16世紀ごろからは、*sport* という英語が用いられるようになった¹⁾。このように語源からは元来、気晴らし、くつろぎ、慰め、戯れなどの意味し、遊戯の意味に近い、またかなり古くから野外における楽しい身体的活動の意味にも使用されていたらしい。

3) スポーツの語義

輸入元のイギリスの *The Shorter Oxford English Dictionary*²⁾ や *WEBSTER'S THIRD NEW INTERNATIONAL DICTIONARY*³⁾ などの辞典類でも、*sport* の解釈として、1. 楽しみ事、気晴らし、慰み事、2. 野外での積極的な活動、ルールに従った激しい身体的活動、などがある。

ところが、現在日本の英和辞典⁴⁾ などでは、最初に、(そのまま) スポーツ、運動(会)、競技(会) 次に、娯楽、楽しみ、気晴らし、戯れとイギリスのものと1、2の順序が逆になっている。国語辞典⁵⁾ では、スポーツ (*sport*) ——陸上競技、野球テニス、水泳などから登山、狩猟に至る迄、遊戯、闘争、肉体的鍛練の要素を含む運動の総称。であり、語源としての“気晴らし、くつろぎ”から遊離し、英々辞典から英和辞典の解釈の順序の違いからもみられるように、今では、スポーツは運動競技の総称というのが一般的な解釈となっており、単なる遊びや慰み事から区別されている。こ

れは多分、スポーツが日本に入ってきた時には、すでに競技的体裁が整っていたからであろう。しかし競技がその目的の中心となっていくことにはならない、なぜならば、スポーツは本来楽しみや、自由のための自己目的的な活動であり、辞典類の解釈においても、楽しみや気晴らしといった遊戯の要素を失ってはいないのである。

競技というものが前面に出されるとき、それが変質してしまうおそれがある。

4) スポーツの意味

スポーツというものを捉える意味で、いわばスポーツ概念の古典的な文献の一つになっているホイジンガ (Johan Huizinga (1872~1945)) の「ホモ・ルーデンス」⁶⁾を挙げてみるが、彼はその著の中において、スポーツを狭義の遊戯として扱っており、条件として以下の項目を掲げている。

1. — 自由性

自発的な活動であり、やっても、やらなくても、延期しても、中止してもさしつかえない。楽しいからやるのであって、命令されてやるのではない。

2. — 非日常性

労働や仕事などの生産的活動や、食べ、眠るなどの生理的欲求とは離れたもの。

3. — きまり

秩序があり、ルールがある。

4. — 定められた時間、空間内で行なわれる活動

などを挙げている。このホイジンガのプレイ論 (遊戯論と訳すとおかしくなるので) は子供や動物などに見られる、疲労したり、興味を失ったりすれば中止される、程度の低い遊戯を指している訳ではなく、文化として、社会機能としての遊戯を問題にしている。

スポーツについて、これをそのまま適用することはできないが、不可欠の要素であることは間違いない。これに現代の通念としてのスポーツには碁や将棋などのものと区別するために、身体的活動であること、競争的要素を含む、という項が必要になってくる。もっとも後者に関しては、単にスポーツに限らず他の多くの物事についても言えることで、他人に勝ちたい、人より優位に立ちたいといった気持ちは、人間の本能に根ざすものであろう。ただ、その勝敗や優劣がスポーツ種目の多くの場面で比較的顕著に、しかも可視的条件を伴って現われるので、人々は激しい肉体的鍛練や労働にも似た努力を惜しまないのである。

このようにスポーツには遊びと違った“まじめさ”があり、楽しみのために始めたものが、次第に競争的なものへ魅せられていった例は枚挙にいとまがない。本人が意

識していなくても、美容や健康のために始めた体操やマラソンを途中で中止せず計画的、持続的にトレーニングしたり、ある技術を獲得するために努力したり、登山やスキーなどで自然を克服するために頑張る、といったことはよくあることである。そこには対人（自分、相手）、対物、対自然との競争が潜在している。

したがって競争的関心の高まりが、人々を技を競い、勝敗を決するための舞台としての各種の競技会へ誘発することは否定しないが、それによって、人々の関心の中心が競技会へ移行したり、高度な技術獲得へと指向することにならない。そこには多くの時間的、経済的なゆとりが必要であるし、より高い肉体的、技能的な要求が課せられることを人々は承知している。むしろ、現状は、技術や勝敗にあまり執着せず、スポーツそれ自体を楽しむ目的の人達が増加しているのが一般的傾向であり、その辺が本小論のスポーツの大衆化と高度化（競技化）につながる。

いづれにしても、スポーツは本来他人から与えられたり、命令されたりして行うものではなく、自分の自由や楽しみのために課した労働と違った行為であり、自己目的的な活動であることには異存がないと思う。

Ⅱ スポーツの歴史

前章では現代のスポーツ概念みたいなものを述べたが、本章ではその発生、発達、定着、および我が国における導入といった歴史的観点から捉えていく。

そこで約三千年の歴史をもつスポーツ史を、大きく三つの区分をつけて考察していく。

1) 古代ギリシャ期——主に軍事、宗教的儀式としてのスポーツ

この時代におけるスポーツの特色は、未開時代の狩猟に典型的にみられるように、生きるための必然的な行為として動物と闘い、隣人や外的に備えるために肉体的訓練を行うといった、闘争そのものを目的とした活動であり、それは次第に、古代ギリシャの都市国家間の中で軍技や祭儀行事に転用されていった。特に古代ギリシャの英雄時代には、戦争の合間を活用して、あるいは英雄の葬送のための墓前競技会として、軍技に関するいくつかの肉体的な競争が行なわれ、多くの名場面が展開されたということが、紀元前八世紀半頃に書かれた Homeros の二大英雄叙事誌「イーリアス」、「オデュッセイア」にも載っている。有名な古代オリンピア祭もこのような祭典競技会の1つで、現在においても、他の祭典競技に比べ、最も価値あるものとして評価されている。その競技会において、どのような内容のものが、どのような形式で行なわれたか、詳しく述べる余裕はないので、参考までに競技種目の主なものをあげて、そ

こから当時の状況を推察願いたい。

競 技 種 目	登場した回, 年(紀元前)		備 考
1. 短 距 離 競 争	1	776	この回はこの種目のみ, その後毎回
2. 中 距 離 競 争	14	724	その後毎回
3. 長 距 離 競 争	15	720	〃
4. 五 種 競 技	18	708	〃
5. レ ス リ ン グ	〃		〃
6. ボ ク シ ン グ	23	688	中止したり, 復活したり
7. 戦 車 競 走	25	680	馬4頭立て, 2頭立て, 10頭立てが出現
8. 競 馬	33	648	中止したり, 復活したり
9. パンクラチオン	〃		その後毎回, 少年種目も出現

この他10種目程度のものがあるが、一つの大会で全部のものが行なわれたわけではなく、いちばん多かったときでも12～13種目といわれている。

古代オリンピア祭では、優勝者に、その栄誉をたたえるため月桂樹の葉冠が与えられ、近代のオリンピック大会では、それがメダルに変わったということは周知の通りである。

このような古代ギリシャの闘争的スポーツは、発生的にも、性格的にも現代のスポーツとの血縁は無関係に近く、ただその競技の形式を現代にとどめているに過ぎない。

そして、初めは祭典行事として行なわれた古代ギリシャスポーツも、オリンピア祭を除く他の祭典（イストミア祭、ピューティア祭、ネメア祭）では優秀者に対して、高価な賞金、賞品が贈られるようになると、それらを目あての競技者が続出し、各地の競技会を渡り歩くようになった。その結果八百長や買収といった不正試合が多くなり、神聖なはずの行事が次第に墮落し、前四世紀後半には完全に腐敗しきってしまった。それでも市民が演戯を楽しむ目的や、賭け試合のために、いくつかの種目は、その後も、後四世紀くらいまで惰性でつづけられることになる。

2) 中世——戦争や宗教的抑圧などによるスポーツの低迷期

前節から既に形式的に行なわれていた古代オリンピアの祭典にも、ローマを中心としたヨーロッパ世界でのキリスト教の布教に伴い、後四世紀末には完全に終止符が打たれた。当時のキリスト教の教えが肉体を卑下して、精神だけを尊重するというものだったからである。それ故当時の世相から、傭兵の軍事訓練以外には市民の積極的な身体活動や、気晴らしや楽しみを目的とした遊戯も抑圧され、しばらくはスポーツの活動が停滞する。

しかし、もちろんこの時代にもスポーツ的活動が全く行なわれなかったわけではなく、遊びを罪惡視する考えが強かったため表面には出なかったが、七、八世紀頃からボール遊びや野外ゲームといったものが、人々の間で、ささやかではあるが徐々に浸透していった。

一般的に中世というと禁欲的時代とみなすのが慣例で、スポーツや遊戯とは縁のない時代とされがちであるが、むしろそういう時代だからこそ、一般民衆の欲求が開放的なものへと向うのは当然であった。そして多くの牧師は、民衆の過度の戯れや荒々しい野外ゲームに対しては抑圧的であったが、素朴な遊戯に関しては比較的寛大であったとされている⁸⁾。

やがて、教会の分裂（1054年）が始まり、イギリス議会の成立（1265年）、フランス三部会（1302年）等の上部組織の改革や、ドイツで職人のストライキ（1329年）、フランス（1358年）、イギリス（1378年）では農民一揆など、下部組織からの開放運動も加わり、一連の大きな社会的変動を伴って人権の尊重、自由の確立などが叫ばれ、こうした背景の中からスポーツ活動も拡がり、近代的スポーツの芽生えへと発展していく。

このような経過で普及し始めたスポーツは、古代ギリシャにみられる軍技転用のものではなく、人々の楽しみのために、労働の合い間の自由時間を利用した身体的欲求のはけ口として、一般民衆の間に幅広く浸透していった。当時のスポーツ活動は形態的にはともかく、機能的には、国威発揚やエリート至上主義のためのものではないという点が、現在の大衆化スポーツと似ている。つけ加えるならば、スポーツの語源はこの頃に求められるであろう。

3) 近代——主に西欧諸国による現代スポーツの幕明け

中世後期から遊びを罪惡視する社会的風潮がゆるみ、世俗的・開放的市民感情が高まることによって都市や庶民の間に普及していったスポーツ活動も、十八世紀に至るまでは、まだ遊戯に近い未文化の状態のままのものが多く存在していた。すなわち、人々が集まるとスポーツはもちろん、飲んだり、歌ったり、踊ったりといったことも併わせて楽しんでいたからである。

それが、十八世紀後半から十九世紀に入ると、次第に競争的な方向へ関心が強まることと相まって、広くヨーロッパに普及し、現代のスポーツの形式に近いものに整えられていった。

とりわけスポーツの近代化におけるイギリスの功績は大きく、現在行なわれているスポーツ種目の多くは同国が生み出したものである。例えば、陸上競技、フットボー

ル、クリケット（これがアメリカに渡って野球になったともいわれている）、ボート、ヨットなどはパブリックスクールを中心に行なわれ、乗馬、ゴルフ、テニス等は主に上流階級に愛好された。

このように、スポーツは形態的には現代のスポーツに近い形に整えられていったが、それがすんなり大衆の手に引き渡されたわけではなく、それまでの世界と同じように、「ウォーターローの戦い（1815年）はイートン校の庭で勝ち取られた」といわれているくらい、一つの軍事目的に利用されていたことは否定できない。これは世界のどの国においても同様で、第二次世界大戦が終わるまでは、スポーツは大なり小なり軍事に一役買わされていたのである。

その頃ドイツにおいては既に、人々の身体運動を体育（Körperkultur）的観点から捉え、グーツムーツ（J. C. F. Guts Muths, 1759～1839）の整理したギムナスティック（Gymnastik）とヤーン（F. L. Jahn, 1778～1852）の創案になるトゥルネン（Turnen）を母胎にして、「体操」という一つの意図的な運動に編成した⁹⁾。そして、体操は当時（十九世紀前半）の時代的制約を反映して、体力、軍事力の強化に主眼が置かれた。それ故ドイツにおいて、イギリス・スポーツの普及が十九世紀後半まで遅れたのである。その傾向は日本にもそっくりあてはめることができる。

ともあれ、十九世紀後半にはほとんどヨーロッパ、アメリカでも盛んになり、1896年第一回近代オリンピック大会（アテネ）が開催されることによって、まさにスポーツの国際時代が到来し、二十世紀の訪れとともに大きな飛躍が約束されたのである。

4) 日本におけるスポーツの発達

西欧のスポーツ、ドイツの体操が普及し始めた年代の我が国は、封建時代から明治時代への移行という大きな歴史の変わり目にあたる時期で、しかもその生活実体は前時代のそれとほとんど変わりなく、国民の約八割が農民で、都市部においても近代化は進まず、多くの庶民はゆとりのない生活を送っていた。また、武力を背景とした欧米諸国との外交や他の隣接諸国との接触により、軍事力の必要にせまられていた。

このような事情の中の我が国では、国家的要請に基づいた、いわゆる富国強兵政策に立脚した、国民教育の手段としてのドイツ的体操に重点が置かれたのは当然の成り行きである。そして体操は学校の体育（体練）に組み込まれ、柔・剣道などの伝統的武道とともに長い間軍事目的に利用されていた感がある。

ゆえに前後して輸入された、非実用的イギリス・スポーツは学生・軍人、および一部の愛好者に限られ、その普及にはなお多くの時間を要し、本格的スポーツ時代の到来は大正、昭和の時代を待たなければならない。

Ⅲ スポーツと体育

1) スポーツの現代化

前章でも考察したように、我が国における欧米スポーツ普及の歴史は浅く、野球、ラグビー、ボートなど大学間の対抗戦や居留外人チームとの各種の競技会が活発に行なわれることによって、大正、昭和の初期には一応の隆盛をみる。そして、「見るスポーツ」として国民の関心も高まり、日本チームの海外派遣や外国チームの来日などによって、スポーツの国際化の波に乗り、1912年（大正元年）第五回オリンピック大会（ストックホルム）への参加が認められ世界の先進文明諸国の仲間入りを果たした。その後も1936年（昭和11年）ベルリン・オリンピック大会を最後に世界が戦時体制へ突入するまでは、国内外を問わず各種のスポーツが活発に行なわれた。

そして第二次世界大戦後、日本は非軍事化、民主化の道を歩むことになり、スポーツの復興もさして時間を必要とはしなかった。

戦前のスポーツが主として学校・軍を中心に行なわれたのに対し、戦後のスポーツは、なお学校を母胎としながらも大衆化の方向へと進みつつある。こうしてみると我が国でのスポーツの現代化は、戦後近々二、三十年程度のもので、東京オリンピック大会がその大きな役割をになったのは言うまでもないことである。

2) 体育について

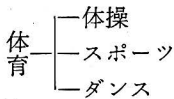
スポーツに関しては、今迄である程度のまとまりが浮きぼりにされてきたと思うが、今後スポーツを現代、あるいは将来にわたって捉えていくのにあたって、スポーツと体育は切っても切れない関係にあるので、本節で体育を取り上げてみる。ここで扱われる体育とは、学校で行なわれる、主に教育的機能を目的とした保健体育科目のそれであり、日本が近代国家としての道を歩みだしてすでに百年、体育も呼称は時代とともに変わってきたが、国家とほぼ同じスタートを切っており、社会的地位を築くのはスポーツよりもずっと早かったのである。

そして体育の概念、定義もスポーツ同様、社会的変化によって推移してきたことはもちろんであるが、ここでそれを長々と述べる余裕がないので、スポーツとの関連において、最近の体育の動向を記す。

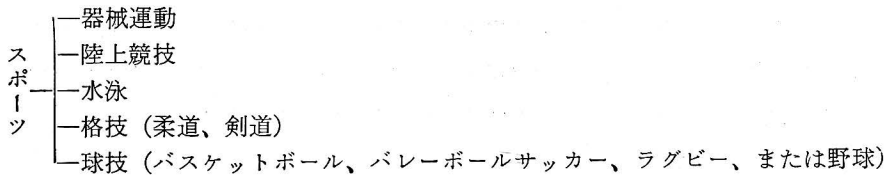
体育の目標が、戦前の体練科時代における「お国のための滅私奉公」的教育目標から、戦後、日本の民主化が進んで三十年経た現在の学校体育の教育目標には大きな差違が見られるのは当然で、教育指針としての学習指導要領では体育の目標を大きく三つにまとめている。すなわち

- 1) 心身の健全な発達と体力の向上
- 2) 運動の特性や生活における運動の意味の理解に基づく運動技能の向上と、生活を健全にし明るくする能力や態度の育成。
- 3) 運動の実践による公正、協力、責任などの態度の育成¹⁰⁾

といったもので、概括すると心身の健全な発達、運動文化の獲得、人格の形成、社会的態度の育成などが体育に要求されている。そしてこれらの目標のために、具体的に各種の運動を適切に行なわせている。その中の各種の運動とは、戦前からの流れを汲む体操、現在広く行なわれているスポーツ、新たにダンスを設け、大きく三つの分類をしている。図式化すると



になり、このような分け方は小、中、高等学校と一貫している。そしてスポーツは5つの領域を保有して、種目特性から下記の分類をしている。



※ この他寒冷地では、スキー、スケートなどを設けているところもある。このように学校体育では、体操・スポーツ・ダンスを区別して捉え、この考え方は、それぞれ行なう目的が違うから、という下記の説明を加えている。

- 1) 体操は本来、健康や体力の保持増進をめざしてつくられた運動であり、
- 2) スポーツは、それぞれの種目特有の技能や規則を運動の中で覚え、結果的に体力の保持増進につながる。
- 3) ダンスは「動きをつくる」ことや「思想や感情をあらわす」といった、創造や表現のための運動であり合わせて体力の向上につながる¹¹⁾。

以上を総合すると、学校体育の場においては、社会的役割をになう体育に主動的地位を与え、スポーツを教育というものに主眼を置き、体育の一つの手段として用いている。いうなれば、スポーツを体育という枠の中に納めている。この事の是非はあえて問わないが、指導要領の中でも謳われているように、スポーツはもともとその活動、それ自体を目的とするものであって、健康・体力の保持増進、社会的態度の育成といった教育的意図を前面に出し、授業の場において半ば強制的、命令的に児童・生徒

に強いることは避けなければならないであろう。もちろんこれは、授業進行の際現場の教師が常日頃苦慮している難かしい問題であろうが、スポーツ好きの体育嫌いといった子供が増えつつあることも考えなくてはならない。

3) 学校体育と社会体育

前節のように、体育をスポーツより優位に置く考え方は我が国の伝統的なもので、スポーツが現在のように学校を離れて、職場や家庭の多くの人達に親しまれるようになりつつはあるが、それもたかだか二、三十年程度のもので、スポーツ普及の中心的役割を果たしてきたのは、(大学も含めて)学校の間であり、学生であったことは疑いのない事実である。スポーツは戦前からの長い間、正課体育にし、課外体育にし学校に依存するところがで、学校を母胎として育ってきた。

そのスポーツを体験してきた卒業生達によって、個人的、職場的に社会に受け継がれ現在の社会スポーツが存在している。

スポーツは、いわば体育に対して一種の恩義があるのである。このような経過からか学校で行なわれる体育活動(スポーツも含む)を学校体育と呼び、社会に出てから行なわれるスポーツ活動についても、我が国では、そこに教育的配慮が認められなくとも社会体育と呼んでいる。

西欧の事情についていえば、体育は主に学校の体育の授業を意味し、その他の自発的活動に関してはスポーツを用いるところが多い。日本の社会体育にあたるものを、西欧ではスポーツと呼び、体育より広義に捉えている。最近のスポーツをめぐる状況は非常に多用化、複雑化してきており、体育の枠にはめることができない多くの問題が生じてきたので、社会的機能体として学校を考える時、将来スポーツの観点から体育をとらえることが必要であろう。

したがってスポーツ活動を単に学校の間だけにとどまらず、生涯体育の方向づけとしての基礎を学校に求めるならば、従来の、運動による身体教育＝体育科教育から、運動文化への教育＝スポーツ科教育、の方向へ進むのが望ましいと考える。日本ではスポーツが本来あるべき姿を呈しているのは、課外に行なわれる自発的・主体的活動としてのクラブ活動くらいであるが、西ドイツでは、すでに授業の中に撰択制を取り入れ、体育科時代からスポーツ科時代へ移行していると聞く¹²⁾。

欧米諸国の流れをみるならば、学校での体育活動よりも地域社会でのスポーツ活動の方が充実してきており、我が国においても、学校以外にスポーツ需要を受け入れる施設・環境の整備が急ぎ望まれる。

4) スポーツ種目の分類

今迄スポーツはスポーツとして当然あるもののように述べてきたが、実際にはスポーツそのものが存在するわけではなく、具体的な、ある行動様式を指して言うのであり、どのような種類のものがあるのか記すのが順序であろう。そこで現在一般的に普及している各種のスポーツを、スポーツの見地から分類してみる。

区 分	種 目
個 人 的 種 目	陸上競技・水泳・ゴルフ・ボーリング・体操（なわとび散歩も含む）
対 人 的 種 目	柔道・剣道・相撲・テニス・卓球・バトミントン・ボクシング・レスリング
集 団 的 種 目	野球・サッカー・ラグビー・バレーボール・バスケットボール
克 服 種 目	登山・スキー・野外活動一般
過程に価値を見出す種目	器械運動・ダンス・フィギアスケート

内容から分類するとざっと、このようになるが競技の形式上、個人的・対人的なものが複数で行われることもあるが、その性格は変わらない。克服種目（自然や物理的障害を克服しようとする）の代表的なスキーも競技の形式をとるならば個人的種目に属するであろう。

この他にも、ざっと数えて60～70種目あり、アマチュアスポーツの総本山である日本体育協会に加盟しているスポーツ種目団体は40以上にものぼる。さらにオリンピック大会では、国際オリンピック委員会が公認している30前後の加盟団体の中から、大会毎の色彩を出して20種目程度のものが採用されている。

余談になるが、現在広く普及しているスポーツ種目の多くは、地域的・全国的な団体や連盟を設けて組織化されており、そのほとんどはアマチュア・スポーツの総本山である日本体育協会の傘下にあるが、他のスポーツに先がけて多くの人々の関心を集めながら発達してきた硬式野球連盟は、プロとの癒着を指適されつつも、今日なお体協に加盟しない唯一の伝統的世界を確立している。

また呼称についていえば、柔・剣道・相撲などの日本的スポーツは戦前からの通り名で呼ばれているが、外来スポーツについては現在片仮名を用いるものが多い。例えばバレーボール・バスケットボール・サッカー・テニスなどは戦時期にそれぞれ排球・籠球・蹴球・庭球の名を頂戴し、現在でもその名残りをとどめ使われる場合もある。伝統的な野球は戦前からのままで、ベースボールとはあまり呼んでいないようである。

ついでに体操は、その用途が広く、ラジオ体操・美容体操といったものから最高度の技術を競うオリンピックの体操競技まで、行動様式は全く違うのに一様に体操と呼び、別に～体操と前に形容詞を付けなくともその時々に応じて適当に解釈し、大した

スポーツ観の変遷

混乱は生じてないようである。

しかし正確には、オリンピックの体操は器械運動でありまたは器械体操であって、前者の体操と似かよった運動や要素はほとんど見出すことはできない。後者は主として器械を利用して人間の最高技能を競うスポーツで、前者の体操とは技術や能力の程度に差があるのではなく、行動内容が全く違うのである。すなわち、キャッチボールやバッティング練習を野球の一種とみなすのとは訳が違い、両者を目的や内容が違った体操ということで片づけてしまうことはできない。

Ⅳ スポーツの大衆化と高度化

1) 現代のスポーツ観

現在のようにスポーツ需要が高まり、単に学校の場にとどまらず、家庭や職場における関心も高まってきた状況では、スポーツ観も第1章における運動競技の総称といった捉え方では適さないものがあるし、体育に重点を置いた考え方で、体育の世界でどう定義づけしようと、そこに包括できない数多くのものが存在し、生産されてきており、一般市民はこれらをひっくるめてスポーツと呼んでいるのである。

このようにスポーツが多様化した現在、体育からスポーツに観点を变えて観ることが肝要と考える。そこで目的論から、スポーツを現代的に分類し、考察を加えてみる。

- 1) 主に教育を目的としたスポーツ観
- 2) 自由時間を利用して楽しむ余暇スポーツ観
- 3) 人間の最高技能に挑戦するトップレベルのスポーツ観
- 4) 見る、聞く楽しみを与えてくれる、ビジネスとしてのプロ・ギャンブルスポーツ観

すなわち、

ス ポ ー ツ	—1.	学校スポーツ
	—2.	社会スポーツ(大衆スポーツ・レクリエーションスポーツ) (・家庭スポーツ・職場スポーツとも言う)
	—3.	チャンピオンシップ・スポーツ
	—4.	プロ・スポーツ

上記のような分類が適当であると思われる。

1. の学校におけるスポーツは、誰しものが一度は必ず体験するもので、課外でのスポーツクラブ活動にも多くの人が参加している。そこで培ったスポーツ体験をもとにして、2. または3.、4. の方向に進むことになる。

大多数の人達は学校(大学も含む)を卒業すると、2. の社会スポーツへの道を歩む

ことになるが、そこではやってもやらなくてもさしつかえはないし質や量を問題とすることもない。中にはやりたくてもできず、テレビ、ラジオを媒介とした間接的な参加を甘受している人達も多い。そういう人達に対し、チャンピオン・スポーツ、プロ・スポーツは観る、聞く、読む、楽しさを提供してくれる。

ここで前 IOC 会長、故アベリー・ブランデーが言った、「プロ・スポーツはもはやスポーツではなくビジネスである」との言葉が想い浮かばれる。彼はスポーツにおける純粋性を尊重し、利害関係が目的のプロ・スポーツを卑下した。これは我が国においてもあてはまることで、ビジネスとして成り立っているプロ・スポーツの存在が、学生スポーツを中心としたアマチュア・スポーツに与える影響は少なくない。

しかしそれは、スポーツに対する人々の受け取り方、対処の仕方に問題がある。「スポーツは本来、仕事から離れた自由時間の活動である」ということには異存がないところで、スポーツで生計が成り立つようにし向けたのは一般の人々であり、社会である。スポーツ自体には責任がないというべきである。

高校野球もプロ野球も技術的な差こそあれ、野球というスポーツに変わりはないので、ただ野球を仕事としているスポーツ・マンを英雄視し、そこで莫大な所得を得ることを許容している側に問題がある。現状をみるならば、政治的変動があろうが、天変地異が起ころうが、そんなことには一切おかまいなく、ある特定の球団、選手などを取り上げるスポーツ新聞等の扱いは馬鹿げていると言わざるを得ない。

これ以上はアマとプロの質的相違になり、問題の中心からはずれるので深くは言及しない。

よってプロ・スポーツも直接参加できない人達に観る、聞く、楽しさを与えてくれることや、学生や社会人スポーツのチャンピオン・シップを目指す人達に、高い技術水準を提供してくれることに価値を見出し、本小論においても、スポーツとして取り上げる。

2. の社会・大衆スポーツ観と 3.、4. のチャンピオン・プロスポーツ観には、参加している人達に質的な違いが認められ、次節において大衆化、高度化といった点から考察してみる。

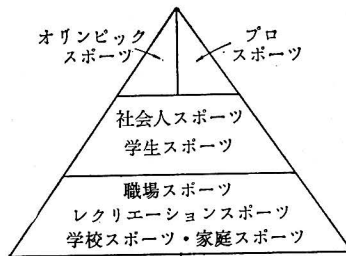
2) スポーツ人口の構造について

スポーツ人口はスポーツ参加者の総体で、直接的参加（行方人）と間接的参加（観る、聞く人）に分けられる、その参加の動機・目的には、健康や楽しさ、技術や記録を高めるなどがあって、どれに重点を置くかは人によって異なり、前節の学校、社会、チャンピオン、プロのスポーツ種群のどれかに所属することになる。そしてスポ

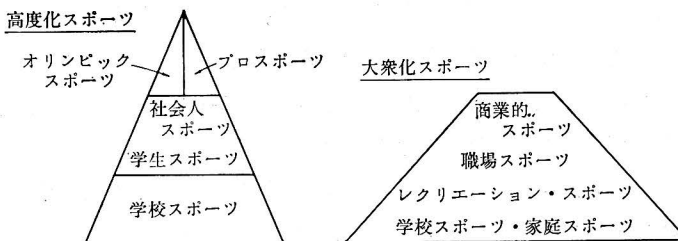
スポーツ観の変遷

ーツの内部的要因から、楽しさや健康のための参加者の増大は大衆化と呼ばれ、主に
勝敗や記録に重点をおいたチャンピオン・スポーツ（プロ・スポーツも含む）の現実
は高度化、または専門化、競技化などと呼ばれている。

参加人口においては、前者が後者を凌駕するほどになったにもかかわらず、国民や
マス・コミの関心は相変わらず華やかなオリンピック・プロスポーツを頂点とした高
度化スポーツに行きがちである。このような傾向は、わが国だけにとどまらないが、
強いものに憧れたり、勝利に固執したりする傾向は、野次馬根性とともに、わが国の
国民気質の最たるものかもしれない。この高度化重視は底辺（大衆スポーツ）は高度
化のためにあるといった底辺手段論の考えを取りがちであった。それを、主に直接的
参加（行方）の人口を、図式化するならば



といった山になるが、これはあくまでも競技会等の優秀選手を目ざす人達の分け方で



あり、勝敗や技量にこだわらない、平凡な満足を得るためにスポーツを行っている人達を含むことはできない。すなわち下図の2つの山塊になぞらえるべきであり、右の大衆化スポーツには頂点はない。何故なら行っている人達の目的がそれぞれ違い、健康や楽しみのためには他人と競う必要がないからである。もちろん大衆スポーツの人達が集まって、勝敗や技を競うこともあるが、それがその目的の中心ではない。大衆化スポーツにあえて段階をつけるならば、年齢や経済的出費の上下ぐらいであろうか。

このように底辺と考えられがちな大衆スポーツ人口は、頂点を高めるための手段ではなく、それ自体が目的になるのである。

3) 大衆化と高度化をめぐる

前節のようにスポーツを行なう人の流れが参加人口の増大とともに高度化と大衆化という2つの方向に変わっていくのは当然の成り行きである。行なっているスポーツ活動は似ていても、その目的や行動様式にはかなりの相違がみられるからである。すなわち人間の最高技能に挑戦し、その成果を主に競技会という場で披露することになる高度化スポーツには、当然のことながら時間的、経済的にも多くの犠牲が強いられ、肉体的、精神的にも高度なものが要求されることになり、多くの人が気軽に楽しめ、成果をあまり問わないそれ自体の中に価値を見出す大衆スポーツとは質が違ってくるのはやむを得ない。

傾向としては両者の質的な相違は拡がる一方であろうし、量的には大衆化スポーツ人口が増大するのは間違いない。人間の最高技能に挑戦する高度化スポーツには、そこに、いろんな意味で高い価値が内在していることは認めるが、人間の技術や能力は科学とともに進む一方で、平凡な技能の人間はこの世界からふり落とされることになる。しかも最高の技能、体力を保持・増進できる期間は短かく、早い時期からその方向に進まないと、高度技術にはついていけない。

したがってラジオ体操の愛好者や、山の頂上から安全に、楽しく、しかもカッコよく滑ることが目的のスキーヤーが何万人増えようとも、そこからオリンピックチャンピオンが生まれることは期待できないし、キャッチボールをどんなに上手に、一生懸命やろうとも、プロ野球で通用することにはならないのである。

チャンピオン・スポーツ（プロ・スポーツも含む）は人間のもつ最高の技能への挑戦であり、それに憧れ、その成果を収めうる可能性のある人々によって行なわれる、いわば競技の世界であり、そして、それには最も効果的・計画的なトレーニングが必要であり、自由時のほとんどをトレーニングに費すことになる。

そこに住む人間は、もはや楽しみや気晴らしといった甘っちょろい感傷に浸っていることはできない。

ゆえにチャンピオン・スポーツは記録や勝利そのものの価値感が揺らぎ、またそのトレーニングプロセスにおける苦悩を押さえるだけの魅力が失なわれると、この競技の世界には住めなくなってしまう¹³⁾、という金子の論を待つまでもない。プロ・スポーツにおいてはもっと厳しく、その人間の必要性・価値がなくなればその人の存在理由が消失し、その世界からはじき出されてしまう。

しかし、このような厳しい世界に耐えられなくなった人達でも、いつでもどこでも暖かく迎えてくれるのは大衆スポーツの世界であり、そこではどのようなレベルの技術を保持していようが、何才から始めようが一向にかまわない。いわば、スポーツが本来あるべき姿で存在している世界である。

もちろん大衆スポーツの世界でも、スポーツの本質から競争という様式が消滅してしまうことはないが、その目的の中心ではないので、仲間はずれにならない程度の技能の追求があればよく、計画的な努力は要らないし、一人で楽しむことも可能である。

現になわとび、マラソン・サイクリングなどの愛好者も多く、既存のスポーツ種目、その他最近では、フィールドアスレチック、オリエンテーリングといった新興スポーツが、われもスポーツの仲間入りへ、といった例は牧挙にいとまがない。これらのものの中から自分の好みに合ったものを選択すればよいし、何も一種目を専門的にやる必要もない。

気が向けば地域社会の競技会へ、可能性があれば高度な競技会にも出ればよい、自分の技能を試すのは悪いことではないし、競技会のために他の事を犠牲にしなければ、「自由時間を利用して自発的に行なわれる身体的活動」という大衆スポーツの粋を外れることにはならない。ここで振り返ってみると、高度化スポーツを悪者扱いしているように思えるが、そうではなく、高度技術を追求できる可能性がある間はそれに挑戦すべきだし、勝負の世界の厳しさを体験するのも重要なことである。辛く・激しい練習を積み重ねて獲得した技術や、試合が終わった後の満足感は何にも替えがたい大きな喜びがある。しかしながら、これらのことを多くの人には要求できないし、大勢が気晴らしや健康を目的とした大衆化スポーツの方向に動いているのは事実である。

最後に人々の経済的・時間的・精神的ゆとりから社会のスポーツ需要は急速に高まってきているが、その供給としての施設・環境の整備は我が国ではまだまだ充分ではない。

オリンピックが終った後、「不満足な結果に対して」いつものとうりの反省・弁明が述べられるが、スポーツの高度化と大衆化の分化が進むことによって、チャンピオン・スポーツに生きる人間があまり多くなることはないであろうし、東欧諸国の国家的援助によるスポーツ活動にたちうちできるほどの社会体制は、わが国では望めないであろう。その結果、世界のトップ・レベルから遠のくことは当然であるし、多くのオリンピック・チャンピオンの輩出は期待できない。けれども一般国民はそれで納得するほど寛大ではない、なぜなら国（日本体育協会を中心に）の金銭的援助が主に高度化スポーツに重点を置いたものであり、大衆化スポーツの施設・環境・指導者の整備にあまり力を入れてないからである。

したがって今後国は、大衆スポーツにも社会的配慮をし、充分な対策を講じるべきである。そうすることによってオリンピック後、納得させられない弁明をしたり、強い批判を浴びたりしなくても済むのである。

ま と め

我が国においてスポーツの発展がほとんど学校に依存してきたのは周知のとうりであり、チャンピオン・スポーツの重要な温床であったことも事実である。スポーツが本質的に競争の要素を包含しており、そこには有形・無形、大小の競争が存在している。

また、人に優りたい、他人より上に立ちたいといった願望は人間本来が備えているもので、スポーツはその場を提供し易いに過ぎない。スポーツ活動でその強まった形の現われがチャンピオン・スポーツ（高度化スポーツ）の現実であるが、時代の流れが競争よりも楽しみや健康といった目的に移行しつつあり、経済的・社会的諸条件の向上により、今まで学生や一部の人達の私有物であったスポーツに、一般市民の多くが気軽に参加できるようになった。このような社会的要望に答えて大衆スポーツが、高度化スポーツに替わって抬頭してきたのである。

しかしながらチャンピオン・スポーツが、かなり以前からその市民権を獲得して、施設や指導体系など明確な路線が敷かれているのに対し、大衆スポーツはやっとその道を歩み始めたばかりで、将来どのような方向に進むのか正しく導いていかねばならない。

そしてスポーツ観もスポーツ自体がもっているものと、それを実施する人間の目的や社会での価値感との関わり合いによって、その性格も決まってくるのである。

最後に現代スポーツをまとめると、教育目的のスポーツ、チャンピオンを目指すト

スポーツ観の変遷

ップ・レベルのスポーツ、見る楽しみを提供する技術水準の高いプロ・スポーツ、自由時間を利用して楽しむ大衆スポーツがあるが、事のよし悪しは別として、大衆スポーツこそ、sport (5) の語義の第1にあった「楽しみや気晴らし」の意味に沿った方向に進んでいると思う。

あ と が き

スポーツが大衆化の方向に進みつつあることは望ましいことであるが、その需要を受け入れるべき体制が、現在のところ非常に未熟であるといわなければならない。スポーツに参加してみたいという潜在的な人口も多いと思われるが、卓球・バドミントン・キャッチボールといった手軽に楽しめるべきものでさえ、施設・環境の整備が追いつかないのが現状である。かといって、なわとび・マラソン・体操など、施設や仲間をあまり必要としない単純なスポーツを健康のために良いからといって、長期間継続的に行うほど人間の欲求はつつましやかではない。興味を失えば中止するのが人間の本性であり、より新しいもの・より高いものを求めるのが人間である。上記のものにはスポーツの本質としての喜びや技術・競争的な要素が少ない。よって多少の経済的出費を覚悟しても、楽しいスポーツの場を求めて営利的施設を利用している人も多い。

諸施設・環境等の速やかな整備が待たれる今日この頃であるが、ともあれ人々がスポーツを欲し、広く大衆に普及しつつある状況は、一体育人として、かつスポーツマンの一人として喜ばしいことである。

引用参考文献

- 1) 岸野雄三：スポーツの技術史・序節，大修館（1974）
- 2) The Shorter Oxford English Dictionary：Oxford University press
- 3) WEBSTER'S THIRD NEW INTERNATIONAL DICTIONARY：G & C MERRIAM COMPANY
- 4) 新英和大辞典：研究社（1968）
- 5) 広辞苑：新村出編，岩波書店（1967）
- 6) ホイジンガ：ホモ・ルーデンス，高橋英夫訳，中央公論社（1963）
- 7) 現代スポーツ百科辞典：日本体育協会編集，大修館（1970）
- 8) 同 上
- 9) 加藤元和：近代体育の歴史とその思想，タイムス（1973）
- 10) 文部省：高等学校学習指導要領解説（保健体育編），東山書房（1972）
- 11) 同 上
- 12) 成田十次郎：これからの体育の方向—ヨーロッパから何を学ぶか，学校体育10月号，日本体育社（1976）

古 宇 田 隆 久

- 13) 金子明友：スポーツの大衆化と高度化における指導体系，新体育10月号，新体育社(1973)

その他の参考文献

- 14) 竹之下休蔵：プレイ・スポーツ・体育論，大修館（1972）
15) 学校体育 8 月号：教科におけるスポーツの指導，日本体育社（1976）
16) 学校体育 9 月号：スポーツとしての器械運動，日本体育社（1976）
17) 成田十次郎他：保健体育科教育の革新，日本体育社（1974）
18) 成田十次郎他：保健体育科教育と人間形成，日本体育社（1975）
19) 梅村清弘他：人間とスポーツ，大修館（1973）
20) アペリー・ブランデー，近代オリンピックの遺産：宮川毅訳，ベースボール・マガジン社（1975）
20) 別宮貞徳：「あそび」の哲学，産業能率短期大学出版部（1974）
21) 別宮貞徳：「あそび」の効用，産業能率短期大学出版部（1975）

（こうだ たかひさ 本学助手・保健体育学）